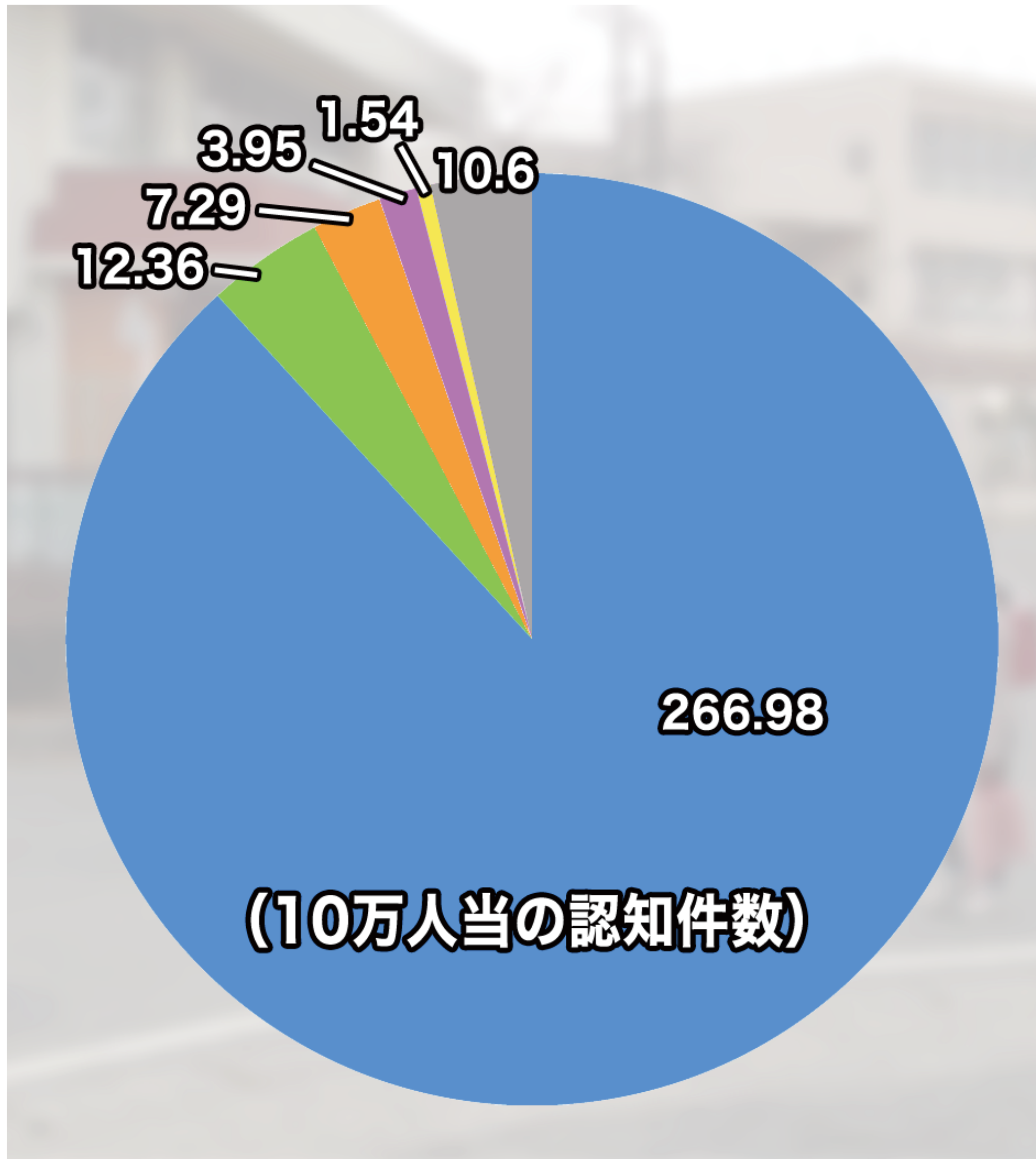


○資料 1 「小学生の犯罪被害件数 (平成 23 年)」



小学生の犯罪被害の上位の罪種は、

①窃盗犯、②強制わいせつ、③暴行、
④傷害、⑤恐喝で、そのうち窃盗犯が
8割以上を占めていた。

また、発生率は、罪種を合計したもので、
10万人当たりで302件であった。

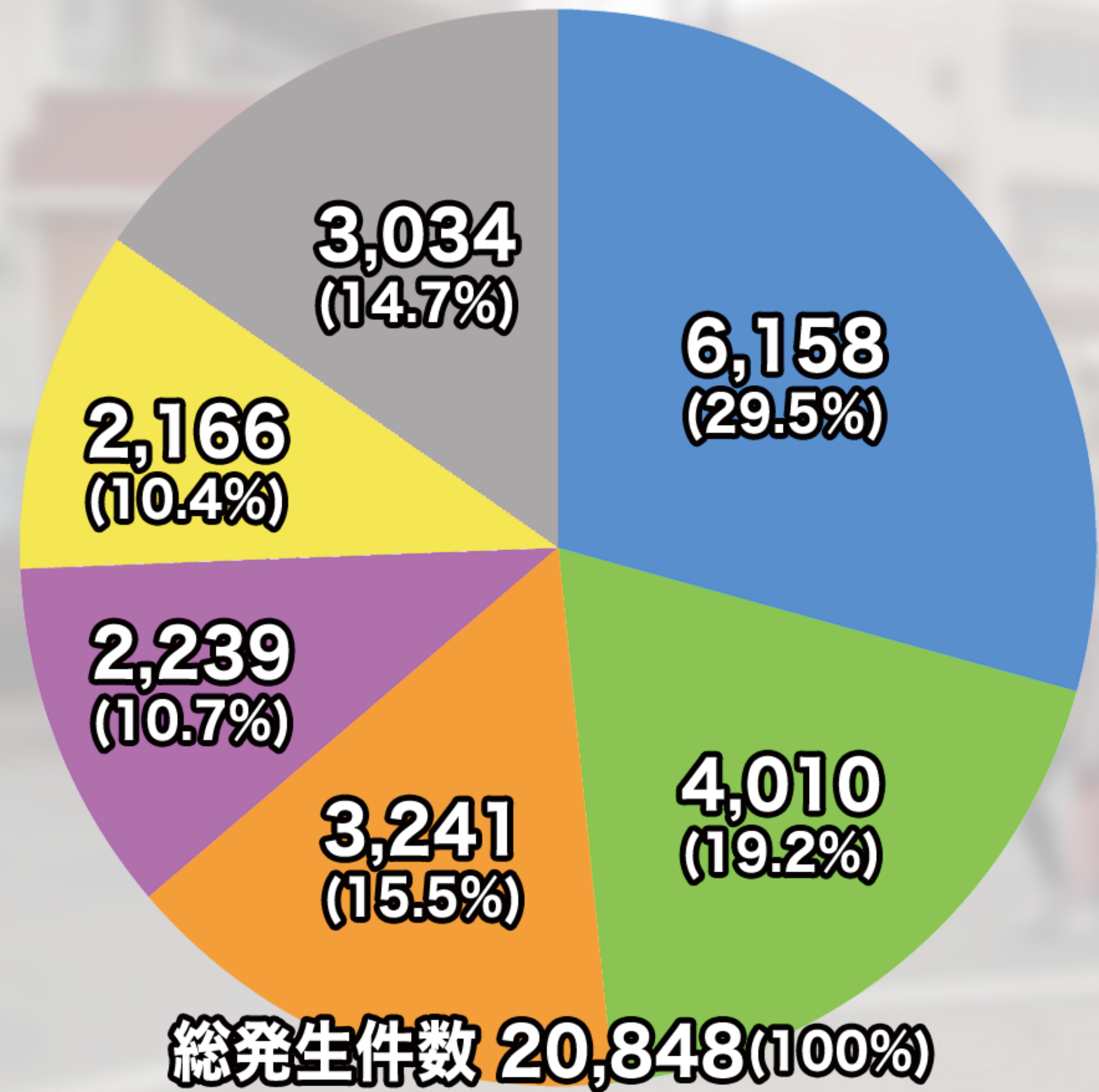
(出典:警察庁「平成23年の犯罪情勢(平成24年6月)」)

- 窃盗犯
- 強制わいせつ
- 暴行
- 傷害
- 恐喝
- その他

○資料 2 「小学生の場所別の犯罪被害件数（平成 23 年）」

小学生の犯罪被害の発生場所の上位は、
①駐車（輪）場、②共同住宅、③道路上、
④都市公園、⑤一戸建て住宅であった。

（出典：警察庁「平成 23 年の犯罪情勢（平成 24 年 6 月）」）



- 駐車（輪）場
- 共同住宅
- 道路上
- 都市公園
- 一戸建住宅
- その他

○資料3 「危険なできごと調査」

先の警察庁の統計では、10万人当たりの被害発生件数は非常に多いとは言えないが、ヒヤリ・ハットのような経験率は高くなる。

このような調査は少ないが、例えば、科学警察研究所が中心となって、関東地方の某市の小学校5校において、小学校入学以来の「被害 / ヒヤリ・ハット」の経験率等を調べ、2258人から回答を得た。特定の市の結果であるので、国内への一般化はできないが参考になる。

その結果、危険なできごとの上位は、

- ①つけられた、こわいことをいわれた、②写真を撮られた、
- ③いやらしいことをされた、④誘われた、
- ⑤(知らないうちに)物やお金をとられた、⑥たたかれた、であった。(次へ)

また同調査での発生場所としては、

①道路、②公園、③お店、④駐車場・駐輪場が多く、

発生状況としては、

①下校中、②遊んでいた、③学校以外の場所への行き帰り、④登校中、

⑤買い物中であった（いずれも「その他」「忘れた・わからない」を除く）。

さらに、保護者への調査結果から、子どもが経験した危険なできごとを保護者に話していない場合が12%程度認められた。

（出典：公開資料，戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発），
研究開発領域「犯罪からの子ども の安全」，研究開発プログラム「犯罪からの子ども の安全」，
研究開発プロジェクト「子どもの被害の 測定と防犯活動の実証的基盤の確立」，
研究開発実施終了報告書，研究代表者 科学警察研究所犯罪行 動科学部長 原田豊）